

---

# 死は芸術

コーキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死は芸術

### 【Nコード】

N4185B

### 【作者名】

コーキ

### 【あらすじ】

父はストレスがたまっていた。毎日の日課である我が子あつくんととの散歩中、その父にインスピレーションが舞い降りる。

てくてくてくてく。

私は父としてあつくと散歩をする、毎日。

会社勤め、中間管理職、これでいいのか？と疑問に思うが実際に私の能力から言って正當なのか不當なのかと言われると「うーん・・。」としよばたれた表情を浮かべ、次の瞬間には何となく納得してしまう中途半端な給料の金額等々、ストレスが多い私はガキを連れて散歩をしているのだ、女房が晩飯を拵えている時間を使って、肉体的疲労を我慢してね、そんなことでもまたストレスはたまっっていく日々、日々。

小学6年生にもなると男の子の運動能力というのは達者なもので父親がこうしてそう、家からわずか50メートルばかりの距離をひいふう歩いているというのに息子はいえどもう、全然元気でこの急な坂を小走りに走りあがっていく。

「むじゃきですねえ、あつくん。かわいいねえ。」

私の唇について無意識にそんなコトバがこの世に降りる。

あの乱暴に跳ね上がった寝癖が雑草のように飛び回る涎臭い髪。

そう、あつくんは口の締めりがなくて睡眠中涎を垂らしっぱなしだからネ。

そう言えばさっき、小走りに走り始めたキミの尻から「ぷっ」と音がした。

この道は坂なんだよ。急坂だ。

キミは私の前を走るのだから私より上にいるわけでキミの尻は私の鼻先にあつたあのとき。

臭かったよ、あつくん。

全体的に臭い感じなんだよ、あつくん。

そう、ふつうのおならに比べて粉っぽい二オイがしたのは家を出るときキミが脱糞したからだ。

尻はよく拭かないと嫌われるよ、あつくん。  
臭いからね。

疲れやストレスがたまつてボツとした脳というのは時に、突飛なのだがしかし、アーティスティックな閃きを生む。

聖なるオブジェ。

聖者は茨の冠を被り十字架を背負っている。

あつくんは頭の皮がずるむけてガードレールで磔になる。

おお、いかんいかん何と気持ちの悪い気分の悪いことか。我がかわいらしいあつくん小学6年生が頭の皮をずる剥けにしてガードレールにくくりつけられているのを想像するなんて。

頭の皮がまるでレザー製のうすら汚いキャップのようにも見えたりしてでもそのキャップの縁がぞんざいに切り取られていてしかも赤くなっている。朱に染まっている。血の色。悪趣味なデザインのキャップであるようだ。しかもそれがちよつとずれていて、あ、ごめんちよつと笑ってしまった。頭の皮が横にずれたガキ。可笑しいね。

急坂を登り切つて国道のそのガードレールに磔になったあつくんを照らしている真つ赤な夕日。ここはゴルゴタの丘。聖者は愚民の罪を背負つて磔になる。キミは聖者かい？あつくん。否。キミは疲れ果てた父がせつかく夕方に連れだしてあげた散歩のその真つ最中に、ありがたい父の顔面しかも鼻っ先に向けて粉っぽくて陰気な二オイのする脱糞後の屁をかました罪人である。悔い改めよ。だから磔だ、がっがが。

がつがつがじゃなくて。ゴルゴタの丘でそんな下品な笑い声をあげてはいけませんよ。ほら見なさい、あつくんの眉間に縦皺が一本。「どした、あつくん？ パパはあつくんのお散歩が楽しくて笑っているだけなのだから心配いらないんだよ、ほらほら横断歩道を渡るうか？ そうして国道の向こうの坂を下りたら海があるよ。」

あつくんの眉間から皺が消え、満面の笑みに移行する。

赤ちゃんの頃とは比較にならないほどに大きくなって成長しているというのに笑顔からはミルクの香りが、未だに漂ってきて嬉しいなあ、父は。

「ふう。」

「？」

小学校6年生。12歳である。

「ぷう。」「?。」

意味がわからねんだよ。12歳と言えば小学校6年生と言えばもう、来年は中学生なんだからせめてしっかりとした言語を発したまえよ。しっかりした日本語を話せとまでは言わないよ私も。何と言っても日本語というのは世界に数多くある言語の中でも難しい方の言語であるらしいし、ただか12年程度しか生きていない誕まみれの寝癪蛸みたいなおまえにはまだ完璧な日本語を話すなんて言うことはどだい無理なことなのだろうから。父はその程度のことは理解してやる。くせえんだよ、てめえ。

話のスジ。これだ。語学的なことは置いておくとして、スジってものがあるんだ、人間の会話にはね。

「ぷう。」「じゃスジどころではなく、会話にならないじゃないか、あつくん。バカなのか、ね、キミは？」

私は父として毎日会社勤めをして、バカの相手に多くの時間を費やしているわけだね。我が子にはこういうバカにだけはなつてほしくないよ、こう思っていたのだが、それがなんですか？このていたらくは。

「ぷう。」「ですと？」

ああ、父ゴルゴタの丘で信号待ちをしながら横断歩道の前にたたずみ、ストレスがたまつてゆくのを感じるよ。脳がしびれるよ。きりきりと煌めくようだ。

スコーン！って感じ？なにせあつくんはバカなので軽い。

信号待ちをしている間も何となくそわそわと落ち着きがなく「わっし、わっし」と根拠のないかけ声を発しながら足踏みを繰り返していたあつくん、キミは後数秒を待ちきれなくて信号無視をしてし

まった。罪人だ。悔い改めよ。と、クライストもきつとブチ切れたのだろっね。とにかくデカかった。感心したよ、私は。すごいものだ。あんなトラックと言うのかダンプというのか知らないがなにしろ貨物車両があるのだね、この世に。車両はキミを跳ね飛ばしたのだけれど、その軽さ。まったくなんの抵抗もなく、何らかの物理法則によってキミの中身が皮を綺麗に残して遙か彼方まで飛んでいったのだ、壊れもせず骨格をとどめたままで。私にはその瞬間がしっかりと見えていたからまず、茶色のネルシャツの胸ポケットから国産の高級たばこを取り出してマッチで火をともして深く一服を楽しんでそして、ゆっくりと近づいていったのはトラックの前方。

ほう、すばらしいものだがちよつと小さすぎるかな。よくある獣の皮を短い玄関なんかに着く敷物のように、あつくんの皮が張り付いている。ドライバーも「まいったよ。」と言わんばかりの苦々しげな表情で煙を吐き出しながら私に会釈し、片手をあげて挨拶をした。これがスジである。言葉はなくとも人間はこういったスジで会話をするのである。

「ぶう。」だから中身がすつ飛んで皮だけになってしまったのだよ、あつくん。数百メートル先すつ飛んで雑草生い茂る草むらに落ちたキミの中身はきつと獣や昆虫の餌だね。土に帰って悔い改めよ。

煌めきは長く続かない。

私は知らず知らずあつくんの寝癖を撫でていて、もしかしたらその手が涎臭くなってしまったのではないかと心配になり、臭ってみたりして。涎は干からびてしまったのか、直接鼻を近づけない限りは他にニオイを轉移させる程の力はもはやないようであって、私の手も臭くない。

歩行者用信号は青色に変わり、自動車たちはしつかりと常識的に停止線で止まった。

あつくんはそれを黙視で確認してからすたすたと横断歩道を歩いていった。

信号無視はしないんだね、あつくん。そう言うことだけはしつかりしているんだね、あつくん。規則を守る堅苦しいガキなんだね、あつくん。

敷物になって玄関を暖め、くたくたになって帰宅する父の疲れた足を癒してはくれないと言うことか。言語道断だな。親不孝者めが。



畜生畜生と舌を打ち、指を鳴らして地団駄を踏みながら私はあつくんの後から横断歩道上を歩行して国道を渡った。

それから海岸に続急坂を気持ちを持ちを落ち着けつつ歩くのだ。それが散歩コースなのだから。畜生。

それにしてもさわやかな夕暮れは血なまぐさい空想を霧散させんばかりの風たちを纏って美しくある。

夕焼けの朱。

海からの風。

ゴルゴタの丘は後ろにあって私を狂気に追い込もうとしているが、この夕暮れさえあればその甘い誘惑から逃れることはたやすい。

愛らしい我が子が小走りに坂を下り、待ち遠しい海岸を目指している。

あ、こけやがった。

かわいそうに抱き起こしてやらなくてはと、私はあつくんに駆け寄りつつだが心の中に声が響いて。

「毎日ゲームばっかやってっから足腰が弱くなるんだよ、あつくん。年寄りのようだ。」

このひ弱な息子の将来を想うとストレスがたまり、潮風は塩辛のようなニオイに変化する。

おお、スнгеエスнгеエ、これは大迫力だと感心した。

こけたあつくんは足腰が弱くて踏ん張りが効かないためか、最初はやっくりとしたスピードだったのだが転がり落ちる勢いにノッて加速していく。

ライク・ア・ローリング・ストーン。

そんなフォークロックなDJもどきの思考は徐々に自らの愉快な笑い声と共に霧散して、車輪のように、妖怪「鬼車」のようになん

だか炎の如く血飛沫をまき散らしながら坂を転がり落ちて行く我が息子の後を私も全力疾走で追いかけて行く。私はゲームなどしない。今は。そりゃ確かに数年前まではFFなんかを必死でやっていて、あまりにも感動的なエンディングに涙を流したりもしていたが、次第に睡眠不足が蓄積し作業効率が低下、社内での私に向けた評価がガタ落ちになり、危うく人生の破滅をみる寸前で我に返ってROMを叩き割ったからこそ今の私の地位がある。ここまで人生を回復するのに要した長い苦難の年月が思い出されて私は疾駆しながら男泣きに泣いた。

あつくんの血飛沫、回転につれて脳天からコンクリの路上に激突し削がれて行く肉片骨片、そして私の涙。それらは渾然一体となつて夕焼けの朱と混じり合い、空気一面がピンクがかつて美しい。削れて痛いかな？ゲームにばかりうつつを抜かしていやがるからそんな老人のような肉体になつてしまうのだ、悔い改めよ。

私は幼児のようにキャッキヤと声を上げて笑い、血塗られた大車輪を追って坂を下りそして……。

海。

空気一面は相変わらず朱に染まっていたし、塩辛的な生臭みを残してはいたがあつくんの頭は削れてなくて、さっきこけた拍子に膝小僧をすりむいてはいたものの概ね元気で海岸に向かって、そしてまるで沈み行く大きな太陽に向かっていているようで、それがなんだか嬉しくてわたしはジンとする胸に手を当てて立ちつくしていた。

坂道。

海。

大きな紅い太陽。

息子。

塩っ辛い味は風であり、また私自身の涙でもあった。

そして海は生き物のように蠢く。

そしてさらに夕暮れの紅い日差しを反射して眩しく輝く波が飛沫をあげながら砕け散る、その海は美しい。

残念なことはこの海は砂浜ではないと言うことである。

とは言いながらも波打ち際には多少の砂があり、それは波打ち際なのだから当たり前だが波が打つその海水に浸って泥になっている。まあ、どろどろであんまり綺麗じゃない。

それよりももっとずっと陸よりの場所が俗に浜と呼ばれている場所に当たるのだがこの海は、浜が一面砂利になっていて歩くとごつごつして、真夏などは石が灼けてみんな「あちちあちち」と、インディアンがウォーダンスを踊るように跳ね回る。

もっともこの海岸は急深なうえに鯨が回遊していて遊泳禁止区域になっているのでここで遊んでいるのは釣り人かあるいは、金をかけずに子供を喜ばせる事に心を砕く貧しい市民くらいのものなのであり、最近では海岸線の浸食も激しくなつて砂利の浜もまた狭苦しい浜になり果ててしまっているのでそう言った貧しい者共さえもあり訪れることはない。

そんな寂れた砂利浜にやってきた私とあつくん。あ、私たちは貧民ではないから。どちらかというと・・・ま、中流でしょうね。ごく一般的な家庭ですよ。年収は非公開。

ところで、あつくんと言えば海に向けて、そこら中無数に在る小石の数々から適宜適当なものをチョイスしては海に向かって放っている。

先程来いつているようにこの子はひ弱で腕力がないから小石は波打ち際まで届かない。従つてずいぶん手前で小石は堆積して行くばかりである。それならもっと海に近づいて小石を投げれば海に小石

が届いてちゃぼちゃぼして楽しかろう？とだれでも思っただろうが、そこはあつくん度胸もないのである。ガキのくせにどこか海に対する恐怖心が強く、溺れたくないからなるべく近づかない方が正解であると思っっているのである。

情けないことには小石が海に届かないからといって悔しがることもないのである。競争心皆無。がんばり皆無。「別にいいじゃん、ボクは小石を投げることでそのもの、その行為が楽しいのであって、海に届くかどうかなんて言うのは大した問題じゃない」といいたげにひたすら小石を堆積させているのだが、その堆積を見てはちよつと悲しそうな顔をするところがいいましい。

たしかにこの海岸線も汚い。たばこの吸い殻とか、花火の燃えカスとか、使用済みのコンドームとか空き缶空き瓶紙パックペットボトルなんかも飛散している。

だがね、あつくん。人間はそういうモノを拾って持ち帰って自宅で処分したり、そもいかなない場合は浜で火を焚いてもやすとか、そういう環境への配慮というか、エコ感覚というかそういったものを持つていなければならなかったのであって、ほら今のキミのようにキラメルかなんかを包装してあったとおぼしきビニール類や空き缶などをあろう事か海に放り投げるという行為は言語道断、許されざる行為なのだよね。またこういう人間としての違反行為をするときに限ってどういうわけだかパワーをみなぎらせて投げるものだからゴミ類はマジで海に投棄されて、白く美しい波はゴクゴクとそれを飲み込んで行くのだ、毒とも知らずに。キミの投げたキラメルの包装紙を喉に詰まらせて息絶える魚や鳥の気持ちを考え、おまえが身代わりになって悔い改めるが良い。

それを見ていた父は一気にストレスが過剰になる。

「んが？」

と言う間であった。

砂利に体育座りしてガキの暴拳を眺めていた私がついに我慢しきれず「あつくん、おやめなさい」と忠言するために立ち上がったその時、海面が真っ黒く盛り上がりそこから巨大な熊手のように波が現出してきて私たち親子を飲み込んだ。

私は幸いにもそれなりに体力も根性もあるので全身ずぶぬれになりながらも足を踏ん張り、耐えることができた。

あつくんは不幸というか自業自得というかあっさりと流されてしまった。

一瞬、磐梯黒くらげのような物体を波間に見たような気がしたのだが、それがあつくんだったのだろうか？  
すぐに消えた。

「おおおおお！おおおおおつ！うをおををををうくつくつ！」

と、私は絶叫し、先ほどまであつくんが投げていたゴミ共ですっかり汚らしくなった波打ち際に膝をつき、ざぶんざぶんとうち寄せる鬱陶しい波の文字通り波状攻撃に身を震わせ頭を抱えて泣いた。

なんとということだ、愛するわが子は父の見守る目の前で残酷な自然の暴挙により巨大な自然の体内に引き込まれてしまったのである。哀れなあつくん、可哀想なあつくん、この父はキミを失うその瞬間に手を差し伸べることにすらできなかったのだ。だって急だったのだもの。

あつくん、キミは今頃きつと、鮫の餌食。

あつくん 食いちぎられたキミの半身はきつと海底に沈んで釣り糸やらビニールロープやらコンドームやらという絡まりやすいゴミたちを引き寄せて、その重量が大幅に増大してしまうほどに絡まってしまつて暗い海底から動けなくなるのだらうね。

そして先ほどキミが波間に投げたあのキャラメルの包装紙、今はまだその軽さ故に海面近くを漂っているのだろうけれども直に、それもヒラヒラと沈んでゆくだろう。そしてそのビニールのたどり着く先。

それが上半身は鯨に食われてなんだか得体の知れないぐるぐる巻きの肉塊になり果てたキミの屍の上。

そう、それはヒラヒラと舞い降りる。美しく、プランクトンの死体のように雪のように。

もう一度私は絶叫して泣いた。

「おおおおお！おおおおおつ！うをおををををうくくくつ  
」！

そして顔面に激烈な衝撃を感じて「いてえな、おい」と呟きながら顔を上げるとそこにはなぜかあつくんがいて、怖い顔をして私を見ていた。

口をあんぐり開けて惚けている私の顔面を更に、小さくて可愛いといえはいえなくもないのだけれども実際には薄べったいので結構鋭く痛いナイフのようなその手であつくんは張り飛ばしたのである。けしからん。

父を殴るとは何事だこいつ。

怒りがこみ上げ、このガキにはしっかりと悔い改めさせなきゃならんあと、指の関節をぽきぽき鳴らして実力行使の準備を進めていたのだけど、

「あそぼ、パパ、あそぼ」

と、とってつけたような笑顔で無邪気にいわれたらもうダメ。

私の顔面は蒟蒻になる。そして息子を抱き上げ

「あつくうくん」

と思わず甘っちょろい声を上げてしまうのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4185b/>

---

死は芸術

2010年10月9日03時14分発行